

28文字 \* 23列 \* 2段 11pt (1P 1288字)

作者名

吾輩(わがはい)は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当(けんとう)がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というのを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪(どうあく)な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕(つか)ま(えて)煮(に)て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌(てのひら)に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始(みはじめ)であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つている。第一毛をもつて裝飾されべきは顔がつかつるしてまるで薬缶(やかん)だ。その後(ご)猫にもだいぶ逢(あ)つたがこんな片輪(かたわ)には一度も出会(で)く(わ)した事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙(けむり)を吹く。どうも咽(む)せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草(たばこ)というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏(うち)でしばらくはよい心持に坐つて

おつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くの自分だけが動くのか分らないが無暗(むやみ)に眼が廻る。胸が悪くなる。到底(とうてい)助からないと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。ふと気が付いて見ると書生はいない。たぐさんおつた兄弟が一疋(びき)も見えぬ。肝心(かんじん)の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今(いま)までの所とは違つて無暗(むやみ)に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子(ようす)がおかしいと、のそのそ這(は)い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁(わら)の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。